2007年1月7日

人間科学研究科長　殿

瀬戸　邦弘氏　博士学位申請論文審査報告書

瀬戸　邦弘氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱をうけ審査をしてきましたが、2006年12月13日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

申請者氏名

瀬戸　邦弘

論文題目

ナッブートの民族誌―エジプト・アラブ共和国クルナ村の事例から―

本文

本論文は、エジプト・アラブ共和国上ナイル地方のクルナ村に伝承される民族スポーツであるナッブートをとりあげ、クルナ村の社会と文化におけるナッブートの位置について論じるものである。論文は6章から構成されており、各章の内容は以下のようになっている。

序章は、研究の目的と方法、先行研究検討、それにナッブートの説明に当てられている。ナッブートは上エジプト地方で日常的に男によって用いられる１～１．５ｍの木製の杖を指し、同時に、この杖を使っておこなう１対１の格闘技をも指している。このナッブート競技は、クルナ村住民の言説に従えば、その祖形とみなされる棒試合がクルナ村の地にかつて栄えた新王国時代の建造物にその描写が確認される。ナッブートについてのこれまでの研究は、新王国時代の棒試合との比較や、また20世紀初頭のBlackmanによる上エジプト民族誌に個人対個人あるいは村対村のナッブートが紛争解決手段としてなされたことを記述する程度にとどまっている。本論文は、クルナ村におけるフィールドワークを通して、クルナ村の社会と文化にあらわれたナッブートの多様な在り方を記述するもので、そのオリジナリティーは高いと評価される。

第一章では調査地の社会状況、それにナッブートを実施する主要な祭礼である聖者生誕祭（マウリド）について記述される。クルナ村は元来農村でありながら、対岸のルクソールと共に、ユネスコ世界遺産指定遺跡を有する地でもあり、近年、観光化が大いに進行しており、このことがナッブートの在り様にも変容を迫る１つの要因となっているが、この点は、後述される。クルナ村住民の大多数はイスラム教信者である。イスラムでは教義上、アッラーの神以外の信仰は禁じられているが、特別な能力や人格を備えた人物を聖者とし

て信仰する習慣があり、そしてその信仰は聖者生誕祭においてピークに達する。聖者生誕祭は当該聖者廟への参詣を核とするが、生誕祭はその周囲に世俗的楽しみごとを大規模に伴っており、当該地域における聖俗混合の一大イベントとして展開するのが現実である。これまでマウリド研究は聖の側面へのアプローチが専らであったが、本論文は世俗の側面から接近を試みるもので、この点も評価される。本論文ではクルナ村のマウリドの中でも特にＡ氏のマウリドを中心事例に論が展開されることから、Ａ氏マウリドの準備から終了に到る過程が詳述される。

第２章はナッブートの文化と題して、競技会の運営の方法、競技の展開の仕方、それにナッブートの技法と関わるエスノサイエンスが記述される。特にナッブート競技の作法や技法に関わるイーミック・レベルの知識をフィールドワークによって初めて抽出した点は評価される。

第３章ではナッブートとアイデンティティ、それにナッブートとマウリドの関係性の問題が論じられる。ナッブート競技会にはクルナ村にとどまらず上エジプトの遠近の諸村から数百人を越える人々が参加する。そうした客人たちはいわばナッブート・エスノサイエンスを介して上エジプト人アイデンティティを醸成することになる。このナッブート・エスノサイエンスそれに上エジプト人アイデンティティは競技者を介して次世代に伝承されるが、個人の立場からは、そうした競技会をまず５～６才で目撃し、仲間うちで遊びとしてまねることから内面化が始まり、14～15 才になって競技会への参加が競技をとり巻く競技者の輪の一員に新参者として迎えられる形で認められると、第２段階を迎える。こうした伝承の仕方を論文作成者はレイブにならって、仲間うちの遊び段階を「非正統的周辺参加」、輪の一員となる段階を「正統的周辺参加」ととらえ、古参の正統的参加段階を経て内面化が達成されるとする、近代の学校教育とは区別されるナッブートの伝承の形を抽出する。

他方、ナッブートは元来は世俗的競技であり、かつ本来マウリドとは文化的親縁関係を有さず、あまつさえその暴力的側面に対しては近年批判さえ生じている。世界から観光客が集まるクルナ村にとってはより敏感とならざるをえないナッブートのこうした一面を競技者達は「聖者のための奉納」という言説を創出することで回避しようとする。言説による正当化は、ナッブートの暴力性を中和すると共にナッブートそのものを聖者信仰の文化文脈に位置づける機能をも有し、ナッブート文化の存続に大いに貢献していると論文作成者は分析する。

第４章ではナッブートをめぐる言説がクルナ村を含めた上エジプトについて分析される。そこでは、ナッブートは男の象徴、ナッブートは暴力の象徴とする語りのほか、ナッブートでの勝敗は競技の場を超えた日常世界においても当該個人あるいは当該集団の優劣意識を醸成し、時に深刻な事態を生じることが紹介される。こうしたナッブートの暴力言説に対し、ナッブートの非日常化つまりマウリドなど祭礼に限って、かつ伝統的モラルが支配する時空間を創出して実施する形に変容させることで、批難をのがれようとする動きのあ

ることが述べられる。ナッブートの伝統的モラルは礼儀正しい人間関係の構築に立脚しており、明からさまに決着をつけることが避けられる。これは実力差や年齢差が著しい場合と否とにかかわらず順守されるべきものとされ、そうしたいわば閉じられた固有の精神文化を身に帯びることで、ナッブーの非日常化が進行していると分析される。

第５章は総括に当てられ、ナッブートが暴力性批判や観光資源化要請の中で、かえって伝統の創造を余儀なくされ、同時にそのことによって生じた、ナッブート・モラルが支配する閉じられた上エジプト文化としての在り方と、これを否定する国際スポーツ化ナッブートとのはざまで揺れ動く今日の文化状況が抽出される。

（本論文の評価）

本論文は、問題設定の高いオリジナリティ性、論述の実証性、結論の妥当性を有し、博士(人間科学)の学位を授与するに値する水準に達していると判断される。

瀬戸　邦弘氏　博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学教授	学術博士(筑波大学)	寒川恒夫
審　査　員	早稲田大学教授	博士(人間科学)（早稲田大学）	蔵持不三也
審　査　員	早稲田大学教授	博士(人間科学)（早稲田大学）	店田廣文